

## 講 演

第20巻第8號 昭和9年8月

## 近代建築様式に就て

(昭和9年6月26日土木學會第64回講演會に於て)

工學博士 岸田 日出 刀\*

On the Modern Architecture

By Hideto Kishida, Dr. Eng.

## 内 容 梗 概

本文は現代建築發展の理由及び沿革の概要を講じたもの。數多くの幻燈を主にして述べたるものであるが、本文には寫眞を省略することにした。

最近一般社會の人々が、建築といふものに對して、非常に關心を持つて來られたやうであります。今夕土木學會に於て、かういふ會合を催されまして、私に近代の建築様式に就て語る機會を與へられましたことも、さういふ一般社會の傾向の一つの現はれと存じまして、建築家の一人として大へん喜ばしく存じます。もともと建築といふものは實際社會と密接に結びついて居るものでありますし、殊に近代の新しい様式に於ては、一般社會の深い理解と關心がなければ、思ふやうな發達は出來ないと思ひます。

建築と土木は非常に密接な關係があります。ドイツ語に Tiefbau といふ言葉と、Aufbau といふ言葉がありますが、Tiefbau が土木で Aufbau が建築であるといふことを友人に聞いたことがあります。必ずしもさうではなさうであります。この二つがどういふ關係にあるかといふことを、御教授に預りたいと思ひますが、何れに致しましても、建築と土木が密接な關係にあることは認められるわけであります。

今夕申上げたいと思ひますのは、世界の建築様式の中、20世紀の建築、即ち現代の建築に就てあります。併しながら現代の建築を知る爲には、古い時代の建築を一通り知つて置く必要があると思ひまして、こゝにその様式の名前だけを表に致してきました。

## 世界 の 建 築 様 式

1. 西洋建築： 歐洲系
2. 東洋建築： 印度系、支那系、回教系

## 西洋建築の諸様式

1. 太古建築
  - (1) エジプト建築、 (2) メソポタミア建築
2. 古代(古典)建築
  - (1) ギリシヤ建築、 (2) ローマ建築
3. 中世建築
  - (1) 初期キリスト教建築、 (2) ビザンチン建築、 (3) サラセン(回教)建築、 (4) ロマネスク建築、 (5) ゴシック建築
4. 近代建築
  - (1) ルネサンス建築、 (2) バロック及びロココ建築、 (3) 19世紀建築
5. 現代建築(20世紀建築)

\* 東京帝國大學教授



過去に於て建築がどういふ風に變つて來たか、これを研究するのが建築歴史といふ科目であります。過去に於ける建築の様式に就て述べることは、時間の餘裕もありませんし、その必要もないと存じますから、古い建築を名前を擧げるだけに止めまして、専ら新しい建築に就て申し上げたいと存じます。

建築の様式は數限りもなくありますが、それを大きく別けますと、西洋建築と東洋建築とに別れます。東洋建築は更に印度系、支那系、回教系の 3 つに大別されます。古來の日本の建築は、支那建築の系統に入る譯であります。

かやうに數多くの様式が建築に起りましたのは、單に建築の技術上の變化に由るだけでなく、地理的の條件とか、氣象の條件と、建築構造の材料の條件とか、風俗、習慣、その國の國民性、更に宗教、政治、經濟、科學或は外國との交渉といふやうな、種々雑多の條件に依つて、建築様式といふものが出來て來るのであります。従て過去の建築が、いろいろの様式を生むに至つた原因を尋ねますことは、とりも直さず今日の新しい時代に、新しい建築がどうして必要であるかといふ事を認識する一つの方便になると存じます。19 世紀の末から今世紀にかけまして、所謂新しい建築が非常なテンポで發展致しましたが、それは建築家の遊戯的な創作欲から起つて來たものではなくて、必要已むを得ざる理由から起つて來たといふことが、過去の建築様式を知ることによつて判るのであります。そこで今夕は新しい建築がどうして起つて來たかといふことを、平易に申上げて見たいと思ふのであります。

ヨーロッパの建築は、太古より中世に及びまして、16 世紀ルネッサンスの頃から 17 世紀、18 世紀即ちベルサイユ宮殿やルーブル宮殿の建築などができた頃を境として、行詰つてしまひました。そして 19 世紀の 100 年間は、現代の新しい建築が生まれ出すまでの黎明の前の暗中模索といつたやうな時代であります。そして 19 世紀の末に、漸く新しい建築が具體的に現れて參りました。

その新しい建築を生んだ理由は、いろいろの方面から考へられますが、大體 2 つの方面に別けて考へることが便宜かと存じます。一つは、建築の内部に於て、建築を新しくし様とする要素が力強くなつて來たこと、即ち建築技術的の方面に於て、材料及び構造の上に於ける新しい工夫、即ち鐵骨構造及び鐵筋コンクリート構造といふものが、建築上に新しい發展を促す様になつて參りました。建築方面に於て、鐵骨構造に依る最初の大規模の建築は、1851 年ロンドンに於て開かれました萬國博覽會の際に、クリスタル・パレスといふ博覽會用の建物が造られたのが最初の例であります。その後 1, 2 年を経まして、フランス、ドイツ、オースタリーに於ても、同じく鐵骨構造の大規模の建築が出来る様になりました。

鐵筋コンクリート構造は、1867 年パリーの植木屋ジョセフ・モエエの發案以後今日に及んで居るのであります。鐵筋コンクリート構造の建築界に於ける出現は、直接間接に、形の上に重大な變化を與へる様になりました。即ち從來の石造に較べると、石材本位、壁本位の構造から、柱本位の構造になつたといふ點であります。

これは主として建築の内部的の要素であります。次に建築の外部に於ても、新しい建築を要求する聲が次第に強くなつて參りました。要するに時代が變り、社會が變ると共に、建築も變つたものが要求されるといふことは、過去何千年の歴史によつて、明瞭に分る事であります。現代も勿論同様であります。

建築とは何かといふことは、建築家の間に於ても色々論議されて居りますけれども、要するに建築とは人間の生活を入れる容器であるといふ言葉が、最も適切である様に考へられます。建築は人間生活の容器でありますから、その内容である所の吾々の生活が、時代と共に變るに従つて、容れ物が變つて來ることは當然の道理でございます。假りに今日の日本に、古代ギリシャ時代、或は古代ローマ時代の建築をつくつたならば、それは非常な時代錯誤でありませう。ヨーロッパに於ても、アメリカに於てもさうであります。假りに一步を讓つて、文藝復興期の建築様

式を建てたと致しましても、それは非常に時代錯誤であると思はれます。設備を完全に致し、構造を完全に致しまして、その使用の上に於ては、假りに現代の要求をよく満足せしめ得るとしても、外に着けて居る着物が、古代或は中世の着物でありましては、これほど不合理な事はない様に思ひます。

東京に例を取りましても、三井銀行或は三菱銀行は非常に堂々として居ります。設備もモダンな設備を致して居ります。構造も超耐震的の強さを誇つて居りますけれども、その着けて居る着物は、文藝復興期の着物でありまして理論的に考へて見ますと、甚だをかしいものであります。併しながら實生活に於きましては、多くの不合理が、趣味の満足といふ點で肯定され、場合によつては歓迎されることもありますから、あゝいふものが決して不合理視されないで、使はれて居りますけれども、建築を理論的に考へて行きますと、極めて不合理なものと思ひます。さういふ時代の變化、社會の變化によつて、建築を新しくし様とする聲が外部に於て強くなつて來たといふことは、現代建築の最も大きな要素であると考へられます。

次の要素としては、建築觀念の變化であります。古代以後近代までは、建築は視覚に戀へる所の造型藝術の一種であるといふ標準で建築を見た様であります。従て繪畫彫刻の如き、純粹藝術に對すると同じ様な態度でこれを製作し、また一般の人もさういふ標準で評價するといふ状態でありました。古い時代の建築も、勿論使用といふことを度外したわけではありませんけれども、それ以上に見るといふこと、又見て美しいといふことを重要な要素と考へて居つた様であります。

一例を申しますと、文藝復興期の繪畫、彫刻の大家であるミケランジェロ、ラファエロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ等は同時に當時の代表的建築家だつたのであります。ミケランジェロの建築又はダ・ヴィンチのデザインしました建築は、今日もヨーロッパにかなり残つて居ります。斯くの如く古い時代に於ては、畫家が繪を描き、彫刻家が彫刻を刻むと同じ様な態度で、畫家、彫刻家又は建築家が建築をしたといふ事が認められるのであります。

今日に於ても、建築は勿論藝術であります。即ち視覚に戀へる所の、造型藝術の重要な一つの部門を成して居ることは、昔と變りはないのでありますけれども、それは寧ろ結果から來たことではないかと考へられます。純實用的のビルディングに致しましても、更に徹底して工場に致しましても、きれいであるとか、形が悪いとか、色が好くないとか、色々と一般社會の人々の批評に上つて、造型藝術の對象として論ぜられる場合がありますけれどもそれは結果であつて、決して目的ではないのであります。同じく藝術と言ひましても、建築藝術といふものは昔と今と本質的には非常に違つたものであるといふことが認められるわけであります。誇張して申しますと、古い時代の建築は見る爲に造られたに反し、新しい時代の建築は、専ら使ふ爲に造られると言ひ得ると存じます。甚だ極端な誇張した言ひ方ではありますが、強いて言へば、さういふことも言ひ得るかと思ふのであります。

現代建築の始祖と言はれるオースタリーのワグナーは、有名なセセッション運動の原動力となつた建築家ですが、このワグナーの喝破した言葉に、“藝術を支配するものは、たゞ必要だけである”といふのがあります。これを建築に就て言ふならば、建築を支配するものは、たゞ必要、即ち實用といふことだけであると思ひますが、これは現代建築の進む方向を示した明言であると存じます。

他の一つの要素は、美的感情が變つて來たことであります。美的感情とは、どういふものを美と見るか、どういふものを醜と見るかといふ感情でありまして、建築に於ける建築美といふものゝ見方が、昔と今と較べて大分變つて來たといふことであります。美の本質がどういふものであるか、どういふものが美であるかといふことは、美學研究者が熱心に研究いたして居りますけれども、未だ定説を聴きません。建築の美に於ても、どういふものが建築の

美であるか、どういふものが建築の醜であるかは判つて居る様で、實は漠然として居るのでありますけれども、美とか醜とかいふものは、大體は判る様な氣が致します。假りにそれが判つたとしても、古い時代と今日とは、その標準が非常に變つて居る様に思ひます。ルネサンスの建築、又はその前のゴシックの建築に於きましては、繪畫的の彫刻或は彫刻的の裝飾が非常に高く評價されまして、優秀な彫刻的裝飾を持つて居る建築は名建築であり、又繪畫的效果を現す建築は名建築であるといふ風に、一般に考へられて居りました。

併しながら今日に於ては、寧ろその反對でありまして、裝飾を加へれば加へるほど、その建築は建築の本質から遠いものである、繪畫的に取扱はうとすればするほど、現代の建築の本質から遠いものであるといふ風に、考が變つて居ります。それなら現代の建築には、裝飾といふものは全然ないかと申しますと、さうは言ひ切れないと存じます。全くよく似た例として、土木の方面に橋梁のデザインといふものがありますが、現代建築の意匠或は計畫といふものは、橋梁の意匠或は計畫と全く同じではないかと考へられます。橋梁の計畫或はデザインといふものは、裝飾的の意圖が全然ないとは考へられません。寧ろそれは非常に大きい要素をなすものではないかと思ひます。私は橋梁の方にも非常に興味を持つて居りまして、橋を見ることは、建築を見ること以上に愉快であります。丁度橋梁の計畫、設計と、建築の計畫、設計とは全く同じである様に考へられます。高架鐵道などの、初期の鐵骨構造のガードなどには、古代ギリシャやローマで使はれてゐた様な裝飾を、柱頭飾などに加へたものがありますけれども、今日はありません。昔は花模様、動物模様などを、橋梁の柱や手摺に附けるといふ風でありまして、誠に建築と似て居る様に考へられます。

次に新しい建築が、どういふ經過で世界にひろまつて來たかといふことを、簡単に御紹介申上げたいと存じます。

新しい建築を具體的に發展させたのは、19世紀の末でありますけれども、建築を新しくし様とする雰圍氣或は傾向は、既に19世紀の中頃、1850~1860年頃に起つて居ります。最初に起つたのは、甚だ皮肉でありますけれども、イギリスなのであります。イギリスは保守的の國で特に藝術方面に於ては、新しい運動といふ様なものは、何等見るべきものがなかつたのであります。そのイギリスに最初の新しい建築理論或は新しい建築運動が起つたといふことは、甚だ皮肉であります。而も最初に新しい建築の理論或は運動を起したイギリスが、今日はドイツ、フランス、オーストリー等に較べて、新しい建築が桁違ひに振はないといふことは、益々皮肉の感を催すわけであります。

19世紀の中頃、イギリスに於ける文藝方面の批評家として有名なジョン・ラスキンは、當時の美術に對する批評に次いで、建築に對しても独自の進歩的な考を發表致しまして、今日の建築は、過去の時代の様な建築でなく、新しい時代に適合する新しい様式でなければならぬと主張しました。次いでラスキンのこの考を受繼ぎまして、ウィリアム・モリスといふ人がこれを實踐致しまして、先づ美術工藝方面に於て新運動を起しました。ウィリアム・モリスといふ人は、美術工藝の革新運動から、後に社會的の運動に進んで、社會主義者になりましたので、社會主義の方面に於ては、藝術的社會主義者の類別の中に入れて、思想家として取扱つて居ります。建築方面に於ては、このモリスの革新運動が導火線となつてフランスやベルギーに新しい傾向の建築が行はれる様になり、アール・ヌーボーといふ新様式となつて現はれましたが、この新様式は新時代への適合性を缺いてゐた爲、間もなく滅びてしまひました。

アール・ヌーボーに次いで起り、新興建築の原動力になつたのは、オーストリーのセセッション運動であります。セセッションといふのは、1897年に組織された綜合的藝術革新團體の名前で、様式の名前ではないのであります。セセッションといふのは分離といふ意味で、古い傾向のアカデミックの藝術から離れて、新しい生面を生まうとする一つの分離作用を意味して居ります。その後ドイツ、オランダ、スカンデナヴィヤ等に於て、次々に新しい運動が盛に

なりまして、今日に至つて居るのであります。セセッションその他の建築は、後に幻燈によつてお目にかけることに致します。

歐洲大戰後には、ドイツ、オースタリーを中心として表現主義の建築といふものが盛んに行はれました。併しなから表現主義の建築は、ドイツ、オースタリー等の戦敗國にだけ行はれて、戦勝國たるフランス、イギリス、その他の國には發展しなかつた。つまり大戰に負けた混亂の狀態から逃れ様とする自暴自棄的な且つ現實逃避的の建築でありましたから、長くは續きませんで、1925年頃に一先づ終つてしまひました。

その後吾々が普通“國際建築様式”と呼んで居る新傾向のものが發展致しまして、今日に於ては、この様式が新しい建築の定型である様に考へられて居ります。その具體的の例としては、東京驛前の中央郵便局、小さなものでは、御茶ノ水の停車場或は最近に出來ました日本齒科醫專等の建物であります。あゝいふ建築様式がどの程度まで今後發展するか、實は疑問なのであります。一般の人から見ますと、極めて殺風景な、眞4角な豆腐に多くの窓を開けて、平な屋根にした様なもので、帽子をかぶつて居らないモダン・ボーイといふ風な感じを抱かれて、悪口を言ふにきまつて居ると思ひます。理論上からは、どうしてもあゝいふ建築になるのであります。將來どういふ風に變つて行くか、特に日本に於ける建築として、あゝいふ種類の建築がどの程度まで發展して行くか、大きな疑問であります。

最後に、日本の建築はどうなるかといふ問題に就て、私の考を申上げて、御批評を仰ぎたいと存じます。今日の日本の建築界を見ますと、その傾向は種々雑多でありまして、或る人は、百鬼夜行といふよりは、百鬼畫行だといふ風に悪口を言ひます。西洋の新しいもの、古いもの、東洋の新しいもの、古いもの、それが白晝公然と行はれて居りまして、實に一種の壯觀であります。一寸4.5町銀座通りを歩いて見るだけでもさういふ混亂狀態が直ぐに分ると思ひます。日本の建築は何所へ行く、それは迷へる羊ではないかと言つて慨嘆する人もありますが、事實さうでありませう。

それは今日の日本の建築家が無能であり、無智である爲とは考へません、建築家としてさうは考へたくないことは勿論であります。過去の歴史を見ましても、一つの國に一つの建築様式が起るには、長きは700年、800年少くも200年、300年といふ時の経過を経て居るのであります。日本は明治維新以後、今日まで僅か70年であります。この間に新時代の日本に適合する様な建築様式が出来るかといふと、それは出来ないのが當然でありまして、寧ろ要求する方が無理ではないかと思ひます。あまりに急ぎまして、直ぐに日本に合ふ様な建築を造らうとしますと、洋服を着て、下駄をはいたり、丁髷を附けた様な建築になりはしないかといふ心配があります。所がさういふ建築が、現に東京に出來て居る、京都にも出來て居る。好評を博して居るか、どうかは知りませんが、兎に角さういふ建築が出來て居るといふことは、決して喜ぶべき現象ではないと存じます。

單に屋根を附けたから日本風であるとか、軒を日本風に附けたから日本風であるといふものではない、窓の形を日本風にしたからといつて、日本趣味の建築であるとは言へない。眞の日本的建築といふものは、さう安直なものではないと存じます。今まで日本趣味を建築に現はさうとして、第一に陥つて居る誤は、寺の建築を持つて來るといふ點であります。寺の屋根の形とか、その他色々の様式を、或はビルディングに、或は百貨店に、或は博物館に用ひるといふ事ではありますが、これは甚しい誤解であると存じます。佛教的の文化が、日本の文化の上にとどの程度まで重要な役割を演じて居るかといふことは論外と致しましても、寺の建築は決して日本的建築ではないのであります。眞の日本的建築は、欽明朝に佛教が傳はつて來ました以前の建築であります。これを今日まで最もよく傳へて居るものは、伊勢の兩宮の建築或は山間僻地にある農家、民家の建築或は今日吾々の往んで居る純和風の住

宅の如きもので、寺の建築といふものは、決して日本的の建築ではないのであります。

ドイツの建築家ブルノー・タウトといふ人は、世界的の建築家で、只今來朝中であり日本の建築に就て熱心に研究をして居られますが、この人が日本に於て最も驚歎したのは、伊勢神宮と桂離宮の建物だと言つて居ります。桂離宮を拜觀し、伊勢神宮に參拜して、始めて世界に於ける建築のバレスタインに行つた氣がしたと言つて居られます。併しながら伊勢神宮、桂離宮の建築が純日本的のものであり、立派なものであることはブルノー・タウトの言を俟つまでもありません。日本の心ある建築家は總てさう思つて居つたのでありますけれども、所謂外國人崇拜で、日本人は外國人が言ふと成程と思ふけれども、吾々が言つても反響がないといふ嫌がある。さういふ嫌があるとしても、伊勢神宮の建築、桂離宮の建築に現されて居る眞の日本的のものを、外國の建築家が味はつてくれたといふことは、吾々日本の建築家として非常に愉快であります。

問題は、さういふ純日本的の過去の建築の精神を、今日の技術によつて、現代の要求を満たす様にどういふ風に話すかといふ點であります。この問題は、かういふ席上で申上げるのに不適當であると思はれ、兎角主觀が入りますし又抽象的になつて、甚だ御迷惑と存じますから、省略することに致しますが、今日新時代の日本の心ある建築家は如何にすればそれが可能であるか、又どういふものでなければならぬかといふ事を、熱心に研究し、熱心に考へて居るといふ事だけを申上げて置きたいと存じます。

建築といふものは、口で色々の事を申上げるよりは、實物を見て頂く方が百聞一見に若かずと思ひますから、下手な話はこれ位に致しまして、あとは幻燈に就て見て頂きたいと存じます。

(幻燈約100枚映寫。幻燈寫眞及び映寫と共に述べし説明は一切茲には略する。——岸田)

#### 久保田會長の挨拶

私から御禮を申し上げます。今日はお忙しい所を、古今東西に互る建築の様式に就て、極めて要領を得たお話を願ひまして、一同誠に興味深く拜聽いたしました次第であります。一同に代りまして厚く御禮を申し上げます。